歌文用例

てにをは

末

へ2
5648
2

門へ2
號 5648
卷 2

歌
冊 二百七十三
號

歌文用例てをはの巻

むすびの格目録

ふはゆるるりるの数　九丁
ゆをもすの数　十一丁
むやもまびらんるんの数　十四丁
きやもまびしきあきの数　十七丁
ぬやもまびしてらきの数　十八丁
をやもまびもの数　廿三丁
もやもまびもの数　廿四丁

いけみむすび　廿六丁
くみむすび　廿八丁
むみむすび　三十丁
ゆみむすび　卅二丁
ふみむすび　卅三丁
いくみむすび　卅四丁
かるみむすび　卅五丁
ちう　四十丁
重ねてをはの格　四十四丁

目録畢

おほむね

てをはの定まりのこと、無くは先達さぶしき事なれ
ども、なほ、よく〳〵考へて、大うたの
人はあやまる事ハあるまじ、初まるびの人を、いうこと
かるよ、さびしきこと、ぬ人を、此むすびはかるとも
かるよりやうぶ、こゝろ行るまでいでくるふも
あるを、さやうの人をも、教ゆる文は、考へかるべし
見るとさんこゝろ、こゝろ、ゆるべはまで
うを色見やうもしめんかるて、はくをりのせるの、
むすびちう、樂とハ、言のやうぢやまいふ、さうを、一首の
ふるぶみもあるべし、いづれの句よりも、上のてを

古度をうけく、結びて、語のきるゝ〻変を皆、うれ
しうぞあるか、今、ふれば結ひの格、又はむをびの格と
やうなわつてかきるゝ〻ゆゑと結ぬときそは も 徒
しかるを ゆゑを結ぶときそ ぞ 山 や 何 とかるゝ結るの
むは結びしは結びるゝもゝ見るゝおれば、

歌文用例

ふ

ふ
なふ
きふ
けふ

ふの結びは格 ゆる ける なる きる せる へる

ぞとかるゝて結ひゝる格

古 桃よりも紅なる色のせあてばせんうゝ所ぞ ぞ 麻あるよを る

円 秋風に初尾ぞ ぞ なとや ある 結ひ事ゆゝけてなつん

源氏 よる波の白ちゝでわゝ浦は要源ぶむ程 ぞ うきなる

古 冬ありて春ぞ来ぬ末はよう花と見ることの見 ぞ ふり ける

めふ
めふ
てふ
れふ
ぬふ
けふ
ねふ
ふ
ふ
経ふ

古 あらけなく吹てもいつゝ世中人淋しきなげきは風そ吹くる
千 くちぬ山ぬ名よそ見ぬる 山吹花のしるしもとゝ咲きはのめ
万 我世ごの春の景色秋風もいつゝ吹ぬ秋の夕暮
古 蓬いとくれ海ぢ秋萩のあぢ紅ばりひかりそ露ぬる
門 いさめよ時ぬ山まそ月八人ぬる 山ぢ世ぢ八人ぬ人ぬ
門 ねをつそ ちひてまつる きの間ぬ言八ぬ人ぬ世八
門 霧ぬ川ぬ世ぬ山ぢ人ぬ風ぬ色ぬそ ぬる
後 色ぬ美ぬ色ぬ秋ぬ高ぬ色ぬ弱ぬ世ぬそ ぬる
古 世ぬ坂の嵐ぬ色ぬ世ぬ色ぬ秋ぬ色ぬ
後 いとゝ八人ぬ今ぬ山ぢ世ぢ八人ぬそ うぬ色ぬ世ぬ色ぬ

くふ
をふ
づふ
ぬふ
ふふ
むふ
ゆふ
ふ、

古 世自然ぬ人ぬ八人ぬそ 男山ぬ人ぬ
千 山橋霧ぬ人ぬ八人ぬ人ぬ
秋 吉野の河ぬそ つひぬ流ぬ人ぬ
源氏 うぬ色ぬ秋ぬ色ぬ人ぬ色ぬ
新勅 山ぢ色ぬ秋ぬ色ぬ人ぬ色ぬ
古 世中いとゝ人ぬ秋ぬ色ぬ
後 秋風ぬ色ぬ秋ぬ色ぬ
古 夏夜ぬ色ぬ人ぬそ なぬ色ぬ ひとゝ人ぬ色ぬ

（付）かくて弦ぬる格 山（付）八世の名の（付）とかそくく ちくくのくく（付）くく 下 くくぬ色ぬ人ぬ

ふ
なふ
たふ
けふ
めふ
もふ
まふ
ぬふ
れふ
をふ

古 梅は花ちるまでは乃ひとくくとよみもせず乃
千 実桜咲は花やさきのこつたなる花乃ちるまで乃をなる
口 おくれゐてなかるまめ人やまとけさ流のまま乃けさ咲たる
後拾遺 雪をとめてよみ人しらず
業平三廣田寺合 中つまさ沒や海くんなりうたかたの乃をさぐける
古 逢坂は関もなきまの山乃けさ霧める
口 雲とみてつるべきまを梅花うたて白し乃神よ度ぶる
金 結ぶれば花やちるらんかわるをいつくも河乃袁ざりぬる
伊勢 おもふ人なつかしきもあるでこうけ乃まぐれまをてまを世ぬる
古 いつるぎし袖の中まを山のけんてこそ乃ふをこちまる

東ふ
ふふ
くふ
むふ
ゆふ
ふい
ふ
せふ

前 郭公なき峯より出けり外山はすそよ野乃満てる
後 いとゝしくはなふくやなりくけんをぬしこそ乃絶てゆ
好忠集 玉垣は三川の湊の素なるまゞ約こよ人乃花をもむる
古 今しいとゝびより梅をさかよ乃高よかりとまきたの
於 郭公て初はつる郭公聴けて鶯乃鳴ゆふ
中務集 初音は鶯より今朝ぞ不山乃山ぬらく

や

とかうとて結びてる格

秘密抄 元満が後といはるる君くるや乃ちよひの雪よとつまて公を
源氏 いさら井の早くの事は言ひをもるのまを乃面ぐうとせる

なふ
たふ
けふ
へふ
きふ
ぬふ
りふ
をふ
くふ
ふふ

源氏 つまなきに[illegible]人や人をも
□ 暮は若きあたりてさんばるにはばかりて花のを や あぢたる
後拾 はあるる や 同じ[illegible]ひとり、面へゆくとふる
古 袁[illegible]を[illegible]捨てる[illegible]雁は花なれば[illegible]宿 や ふる へる
後 うちかへし九月ぐ[illegible]さかさとれ大[illegible]でふる や かへ きる
□ [illegible]ひ[illegible]旌 や る ある 秋の野[illegible]花虫は夢の[illegible]
□ 蔦絡[illegible]人あ[illegible] や [illegible]ぐら[illegible]あめ[illegible]あ つる
古 男[illegible]るさ[illegible]に[illegible] や る [illegible]の花
□ みる[illegible]我[illegible] や かる[illegible]で[illegible]くる
後 秋の野[illegible]女郎花[illegible]人[illegible] や ふる

用例下

十五番 山めぐりあぐれ や を ぐる 松風[illegible]ふくかとなけば軒の[illegible]水
月清集 吹風 や [illegible]ちる [illegible]
源氏 九月[illegible] や 濃つる [illegible]の月をほ[illegible]
千 女郎花露[illegible] や [illegible] なぐ[illegible]袖の[illegible]
万 [illegible] や 郭公[illegible]
中務集 [illegible]花咲[illegible]
大帖 [illegible]別 る [illegible]河[illegible]

何とかて[illegible]ひとる格
[illegible]

ふ
なふ
たふ
けふ
せふ
ぬふ
ぬふ
ゐふ
きふ
くふ

古 君をおきて思ひまちたる白山の雪の六月までもかくる時の間
ゐ あしがきの思つどやいひそめぬなど世中のあづまを紀かる
ゐ 撫花ちるを見るなるあだなれうつるを恨をそてたる
菅方 ゑ武蔵をたのむべしやあきなれば いつれうるぶるうぐいすける
拾 たなびく武蔵の雲別もゆくゑをいづくもなどうゑが紀ませる
千 水多武蔵の庄は深枕ふる紀おりひをたれ寄かる
後 涼く思ひうめつといひやはいつうる秋風ふるて袖ぬる
古 岩き〜かもとて折ゐる春霞ふかくとうん山はさてふ紙
菅方 秋の野なる雲らよ春の雲る秋ふるあるやりゆく
拾 我宿の花の撃みはさわるて武いるふる朝ふ外ふうへる

ぬふ
せふ
ふふ
ゐふ
ぬふ
ふふ
むふ
ゆふ
ふゝ

新 郭公一声ふるて拾へいるそうひとのいをあるとく ぬる
拾 我やとをいつ川あしてるなしいを思ふ浮おとせる
口 いつとても いくよふるかふの浮寝ぞ身をもあげてん
後拾 ゆふ八岩ん きつ思ひ八ゐふ三ゐあの人ハおとをあり
新 岩ん ゐ武ニ情のひづくもあるふ拾の紙をゐる ぬる
万 ふよ しかもあたくさ ゐる郭公海春ゐ紀あ思ふはされ
口 是引の山橘を春紀てゐ紀春を岩ん うぐ ゐる
吾 吾妹子ぶいろよ思へうぬ、をまを一枝も拾ふど美ふ足 せる
古 いくよもつひ吾ゐをふぐもかく蛍のうるもよ思ひ紀 ゐる

ふ

ふの結びの格 ㊀ ㊁ 徒 とかつて結びてふ ふ にて。
上のふ とかつてのみ其ハ結ばること。

㊂ とかつて結びてふる格

ふ

ふ

ふ

古 月数よ ㊃ あぬへきふ ふ 記量百用もふるふ合びつる結ん
堀後 宿ふて結とそ ふ とかつてもそさ結ぶ木絮ちる ハ を 記 ふ

㊄ とかつて結びてふる格

六百番 花ハ殺ふ此ぶると ㊅ 乃てふる ふ 柘聖ハ出ぬ麦ぶ恵き

徒 よ結びてふる格 徒 かつての詞記を今かりて徒とのみ下皆出れておれば。

古 三田河ふ此ぶ ふ 神武のふ ふ の少ふ田ふふし

比結びものふ と結びて ㊆ ㊇ 徒 とのこかく
つて上の ㊈ ㊉ ㊋ 何 とかつてふる格と変ふる

ゆゑハ㋐㋑㋒何とかゝる時ハ上の結びもい

[ふ]るゝ　[ふ]るゝ　[ふ]るゝ　[ふ]るゝ

とやう〳〵[ふ]るゝ　とりつゞき接ふる也　[ふ]とはゝ也

べふるゝて、㋱㋲㋳とゝるあり終下はゝ

合せ考へべし

[ふ]の結び　ゆゑハ上のニ二の結と異なり甚よりハ終とゝのへ

[ふ]　[ふ]　[ふ]

㋱とかゝるゝふ

後いづゝとも長ハ笑ハわるゝよ降ぎるよりけく山ハ雪ふ[ふ]

後松しおるゝの松葉の長ハ思ひや[ふ]いるゝ雪ふ雪拂ふ

㋲とかゝるゝふ

後夕暮ふ山ハ㋲か、[ふ]白雪ハ降ゝ行ゝ雪ハ降ゝ

㋳ゝ結びゝふ

万　知ぬべゝ知人のゝハ[ふ]よびよせてゝぎ者やゝん橋の海ゝよ

ふ　ふ　ふ　ふ

古 [illegible]波ぐるまちくらしのまゝ夜をあけ[illegible]ぬ[illegible]る 百

そ とかるとてるか

古 おもはぬ瀧の白玉ひろひ集て世の夏時の涼ふそ かる 百

つくもの共本のかぐらよ立そよる 百 表の高山の波を立つゝ

け とかるとてるか

古 雲の立て雲のねたるとかしら山けぶけ おぼぐるつち 百

や とかるとてるか

ふ　ふ　ふ　ふ

後 白雲と見てつる物を揺ぬ公あちるとや 百

口 鄭ゝ拍て舞と 百

何 とかるとてるか

古 雑波ぐるまちくらしのまゝ夜をあけ[illegible]ぬ[illegible]る 百

口 花菊波間のやどろ[illegible]平[illegible]る 百 [illegible]

はしら弦びどものは も 徒 ま そ け や 何 とも

かるとて 百 と結ぐるまとこ。上の二つの格ごるとん。

ちてこるる故る。ちそ の弦びのとは。其けだあた

さぐるよ別をくあるしき弦びどものをほのまて。

（は）とかくとて舟へ「雪ふる」「まり」「ひや」「き」
「ゆき」「ま」あど「ふる」「ふり」動詞「ま」とふる
ふり又上の格の（は）（も）（徒）とはきかるとて。
「ゆき」「ま」「ゆき」「ゆき」あど弦びくる物ども（ゆす）
の弦びのもの。「ゆき」「ま」「ゆき」「ま」あど
「ゆ」すど動りめあり。見て上のむとびもの
格とゆ弦びめの格とのけぢめを考へまつり
べし。

「ま」の弦び格 「ゆ」「せ」「ま」「ゆ」「ま」

（は）「ゆ」「ま」

古 人とあらむつはものの（ハ）ゆ人はたて物ちりあるよ雲はたり「ゆ」
初六 初雪はふるの神枝はまたてあるあるよ雲べ（ハ）みどり「せり」
古 家屋八物の底ゆ出でもむ出をうぢゆと人（ハ）いと「ゆり」
金 當代のあ（ハ）いふわるまるせまり「ゆ」民やとげあるあが代ち
古 殿堂を成すあるが神あもるハかりくぶ長（ハ）まゆ「ゆり」
後 いせわるる河し神ゆ流ゆまべらるよ人ゆ（ハ）浮ぬあり「ゆ」

め
き

せ
な
た
け
め

後 伊勢物語の釣の糸はけぶるを八重の沈めり
古 みさをつくしたるまもせぬ城里の春の八重の増さり

(と) とかくさまかくさまなる

後 ひとふしふしに宿を定めて留れの春ぬきの八重の花
新六 花をたづねて神のをくようけてたりひの春雨と西のたづせり
夫木 神奇なれば花のしるべ蔦のもみぢ葉の蔦もあり
扶 年ふるまでぐひ(と)えたり大江山里たのもしく光もゆく
古 秋の夜(と)宮のうりけり遠とぶまでぐもぬけぬる
後扶 五月雨の日(と)蓮あり道をも山田の新へとまもまたる

古 春日雅八今日の高やきそうあまはつるもみまはつるもあり我(と)鏡けり

(徒) よ殺びくるふ

風雅 音のこの宮ぞひ郭をたかてわれとすむ石の宿
古 はとのうづもとみやこの紫と殿つくり せり
扶 秋はまを人はの宮の春と あり とはくいざこのうん
夫木 ゆふ木の春をさる 平 りいるぶきの光だりそゆふぎちはの
古 我宿の池の宮殿 ぬ けり 山かくばしりかるうん
口 立田のもみぢみだれて流 ぬ りてとぶ鶴あるや絵れん
万 わが心をも妹あげしに風早は浦のおなべて春ぬび けり

新 秋をへて月をあがむる[まり]いそぎ長生何あげくん

む

らむ
けむ
ふむ
てむ

む の結びの格 らむ ふむ けむ てむ の結びの格

は とかくらもふ

古 ゆくすゑの白山ちかき雪のまくず 伝 ハ たづぬ む

門 雪立て居ぐ好くふる河岸の竹ふ法 ハ ゆきしねらむ

新 蕗をてくれもさらぬ蕗の葉と多八ふくも雪 ハ りけむ

古 かくもまさる原山がくれの朽木ふれ花を雪 ハ ふりふむ

門 たのもし 寄今 ハ かへ てむ

む
らむ
けむ
なむ
てむ
む

（も）とかくらもとてるか

古 あしべなる（も）あはぬ（む）の葉をいたずらにぞ山風のうぐ

拾 こよりぬる（も）の葉つもれる（らむ）雪の内のひぐらしぞ鳴くなる日数へぬべ

新 つれなくてはぐくたてしいもせをもあけと（む）年をぬるかな（けむ）

古 君をおもひてかぐ（む）ものりの川ぞこ（む）もまくら（なむ）

拾 ゆくらとも紅葉をかくす藤袴あきの（む）ぶけ（てむ）

（徒）よ詰びしるか

古 鶴山いぶこえよりてかんてゆく（む）年へぬる身おいやーねること

用目下

（そ）ふかくらもるか

後 春ひいでくらもはつ（む）ぶ林をつるるれがりをそまるまる（らむ）

古 よそにのみ恋ひ渡りの手音鹿河ふるもるもるかめ（けむ）

口 人ぞ恋ひ思へどくるる紅はをあつむもれのいろよいで（ふむ）

だ
らむ
けむ
ふむ

後 春ひてよそひめ出でて春をまづ代の秋ぶ（そ）張ぶげ（む）

古 春日野を若菜つ三つ業代をいとふ（そ）ものら（む）

拾 ひつりしよかんとて（そ）別れ（けむ）ふるる波のうへ（ふむ）

新 春くぶ都のまりのようびとの名にて（そ）きあ（む）ものらるも

らむ
けむ
ふむ

むる
らむ
けむ

(丸)しかるとてふる

大和物語 山里に我を忘れて別れぬる雪のまもなくあるらむ

万 山園生は百本のうめは散花(丸)かりて花はつゞきて咲けむ

新 人家のうへにて紅の梅(丸)ふゞれ品しいもとびまふ

(や)とかるとてふる

古 うゑしうゑだ結ぶまで(や)さゞげて(丸)花てちらぬ結ぶ

万 神しまぢて結びしふゞ氷まてはまろしいもとけ(や)あらむ

万 夏山に雪さへ(や)ふりけむ(丸)ふるとてふる

ふむ
てむ

むる
らむ
けむ
ふむ
てむ

万 立田河もみちふゞれて流るあらわてふゞ中(や)絶れん

賢之集 乃てはとこ(や)立ちてさて花ちるを切もとうしあるれば

(何)しかるとてふる

古 ふるとなれる長柄の橋もつくるれりと人をふる身を(何)なれとむ

万 春雨(何)かるとてふる(丸)さてふる色数をもぶにもかるべき越後

万 東路のさ和の中山ふるとて(何)すゝる人をおりひまる(丸)けむ

万 (何)方と行かるま(丸)ふむ 世中と身のあはぬをそ人もはらけき

万 春日野の飛火の野焼出て見よ今(丸)日はりてふるれつゝ(丸)てむ

かふ と かよふ らむ

古 ぬばたまの 夜くさめて 月 久かたの 雲のどけき 春の日に 月 春の花 いつ散りぬらむ

○鈴屋翁云。右のうたもいつれも上句は花とあらで。

らむ と 留る。又 花 すぐ 多紀ものりそ八

古 ほとゝぎす 月 なき渡る 夏の中 月 ふるさと 渡る らむ

ふるさと の 人の ふるさと の 花 ら む へかる べ

月 我 夏 夏 夏 の 中 ま で 人 の ま ま へ 渡 る

さ ら ば ら ば 花 の ま ま ら む 人 の

ま ま に 鳴 ら む 古 人 今 一 の 花 ざ し 浦

と 見 ゆ る 甚 る 多 ハ 鶯 の ま ら む 移 ハ ま と 見 ゆ る 都 を

鶯 な く 何 と て 花 ら む ま で

ま く 鶯 ま で 花 ら む ま で ま で 花 ら む ま で ま で 花 ら む ま で

人 の ま で 花 ら む 人 の ま で

ふく花の苑 [らむ] ゆゑとて ちりぬるかぜ花の苑
[らむ] ゆゑとてちりぬるかぜ花の苑
おもひつゝ ものゝ [つけて] ものゝ
ものゝ [つけて] おもひつゝ
ものゝ [つけて] おもひつゝ
[らむ] を [らむ] を
[らむ] を [らむ] を
[れ] ものゝ [つけて] おもひつゝ
[れ] ものゝ [つけて] おもひつゝ
[れ] ものゝ [つけて] おもひつゝ

しねとこそ枝をとひかるるあり〻ありけるたどるを皆かくのごとしとも〻以上鈴屋翁説

き

の活ひの格しきみき

ち
ふち
てち

ち
ふち
てち

は

とかくアとふる

後 風かも何ともせん橘花匂ひけるぬさちる ハ うかり き

古 よろづ社と思へだてつる仏 ハ 天ぐがぐとあり 恵

ロ うたて移ろ者き人を見てより後て物 ハ たのこ初 恵

も

とかくアとふる

万 かくだろう者む物ずと言ふ妹が殺まるねよ も こう き

後 ふぶつも伏見里の前りかもし人のうやと も たく ふき

万 曙たり人をおりてぬぎ玉はれ知ぬ れ も いも移る て き

紀
ふ紀
て紀

(徒)ゑ 結びてゐる

万 三輪山の杉間へまたゆふかけまはすなり長くなりぬ き

古 後 ゆかしくもしたしみの園もほどひ ふき 夏の月さと人さごめよ

白雲は皆一ぢくるゑしいもとあをて実をおりひろあて 紀

(は)も (徒)とかくてて 紀 とむすびてゐる。

さ去の き ゐり。

(そ)とかくてゐる

紀

紀

紀

古 かくづるとちと ふ枝をいづばるみ初てゐるとん人さ人 (そ)ゐ き

門 妻の日の光よつるる我るたがぢらけ雲とある (そ)ゐる ひ 紀

(ま)とかくてゐる

古 後 独て枝をおりへば私の田のいも苗もうよとゐる人 (ま)か き

吹風さそふ枝ふちりみづ数める花 (ま)ちひて 表 紀

(や)とかくてゐる

千 思ふおりとみ枝よ (や)ちげき 海よ香住田の森のかくてあくこ

古 私義もちづ紀家ごちりくとりづるれのねざと (や)よふ 表 紀

紀

紀

(何)

古 後

[illegible]

(ど)

[illegible]

(ど)

[illegible]

き

き

(そ)(ね)(や)(何)

皆現在の紀あり、

紀

ぬ

ぬ

ぬ

ぬ

ぬの活びの格

古

(は)

[illegible]

(も)

[illegible]

新

谷河の[illegible]

(も)

ぬ

(徒)

[illegible]

新

[illegible]

ぬ

ぬ　ぬ　ぬ

は　も　徒　とかうまつる　ぬ　もとひくろくこれ
年ぬの　ぬ　あり

そ　とかうまつる

古　撰集抄　変ぬる物思ひ　そ　人のうらう　そ　風も吹く人　ぬ

け　とかうまつる

古　うち山の白雲語りて入る人　け　おぢ仕せ　ぬ

ぬ　ぬ

や　とかうまつる

古　月やあらぬ春や　や　むかし　ぬ　春ひとり　ぬ　ながめて

何　とかうまつる

詞　あ雲ふ　濁ふ　ぬ　七夕の　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

そ　け　や　何　とかうまつて　ぬ　と結びまつる

皆ふの　ぬ　あり

志の結びの格

（は）ふらとゝふ

古 おるぶとよゝもゝ紀名（ハ）ふねべ［1］人あくかゝ名ふこゝろ

後 秋家ふしたゝ（ハ）姫［1］女房花ゝゝる人わけるんと歌りへど

（も）ふらとゝふ

古 いつまでう聖べゝ山のいつぐもれん花一数ど年代（も）へねべ［1］

口 いぞまゝよ我女ゝ人ゝ菱原や結んは蛍けいゝ居ゝ（も）を［1］

（徒）よ結びゝふ

古 流激つゝきゝの水上ゝつりゝと老みけゝしふ忘れ所ふ［1］

口 つゝれ恵［1］今もゝゝて小山が川の垣ゝるさけゝる人わ恵でゝと

（は）（も）（徒）とかゝるて［1］ゝ結びゝるゝ皆

現生の［1］あり。

ぞ とかうちてうふ

古 緑ふかひとの秋と ぞ 春宮 □ 秋ふるこけ花まぢきける

秋 音ものこゝろ こゝ情のやうも秋の秋を我 ぞ 見て ふり

古 より 竹河 岩波 高くかのくやく ぞ 人を西ひうめ て

や とかうちてうふ

後 ちまとの秋 もまれくやまちかうて や 我を人のたのめ □

古 郭公 峯の雲 や まだ ふり 五六記けど見ちてうふ

用例下

て

み

て

古 何 人うねてぬぎうけ □ 友待 秋ごとの秋ぐ自分

新 八重あぢくさもかうぬ山の ど 九重さうどおり ふり

後 いと とも落ふ て 郭公かうかみ山のさみぢしの色

ぞ 廿 や 河 とかうて □ もちいうふ。

皆 色 の □ ふり。

まの結び

は　ものうとくうる

古　吉牛よたて橘のあるうぶ吉の心は　ばけうる　中

も　ものうとくうる

古　金刀比羅きと　も　あるうる　中　吉こぶ〈金ぶべうひる

徒　よ結ひぶうる

後　於　さひわく来あるう　中　庭橘あての後の船出あるうぶ

で　ものうとくうる

古　今日長崎ぶ高島と　ま　陸あ　中　清ぶ〈ぶるもも花とあるしや

や　ものうとくうる

古　吉うれば屠蘇あるう白ぶ式乃行あるうまと　や　つて　中

何

古　暑ば合ものうとうるぶ吉うるぶ　中　れ　ものうとくうる　中

は　も　徒　そ　の　や　何　こふうらひて　ら

とゝぢりそぐ　ぎそ　ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ら　の結び

古

は　とかうまつる

小倉百人一首　文ぬら　唐今昔物語　月夜　月夜　月夜

も　ともうらつる

新

裏風のふくふと吹る涙ゝ乱ゝ　も　氷とく　ら

徒　と結びつる

古

立田河ゝ　紅葉　あぐる　神　ぬ　び　の　ま　ま　の　山　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

や

後拾遺

いかるがの　や　初もとゆるら　所なるおいたる浦なれば

新勅撰

立ちのぼる　ちりの浦なる　春霞　ちりつもりぬ　今　や　ふるらん

何

壬一集

あしびきの　やまのはの　橋もうちたえて　ひとくも　何　ちるらん

新千

初しぐれ　ふるの山里　いろ　ふらん　住人さへも　神のゆるさん

ふる

古

わすれぐさ　人　ふる　いろ　ふらん　白玉ぬきみだれ　ふる　袖ぬれぬ

は　と　彼　そ　ぬ　や　何　ふる　いづれの　ゆび

ゆるぎなく　ふらん　のふりて　他の　辞　ふる

例　あれば　ふる　あり。

ど

の結びの格

は

古

夢語六巻もやまびこ毎へども現よりひとあみだぶつ（い）あり ど

も

古

ちりぬれて塚しるの名ふあれば秋過るさくらの花 も ちるまで ど

徒

み結びなる

後於

ぶりの山はとばのこあり ど 大うら島はてもやまびこ

と の結びの格

徒 と結びてる

万 我君よりけさ来し結ひてつぐれをくれてこいや寝もと

け結びとは も 徒。このとかりて。そ け や

何 とかりん。そ け や 何の時ハ「やとる

と結ひ」ぶ結ぶ。次のむとびと考へ合せ

べし。

と の結び 上の結びに其まゝハ沼とつゞく

徒 と結びてる

堺 四方山は父の家に成きよをけく炭が由烟立 と

そ とかりてる

古 ぬるくあるる洞 そ 神くもいあ と 我いせ紀あ そ 結つせあれど

や

於遠五等
[illegible]

何

挾衣
[illegible]

[illegible]結びの[illegible]は[illegible]も[illegible]ず[illegible]や[illegible]何[illegible]か。[illegible]れ
[illegible]く[illegible]と結ひて。上の結びと[illegible]ら。[illegible]
[illegible]結びの[illegible]ども。「[illegible]」「[illegible]」と
のこいて。「[illegible]」「[illegible]」と
いとび。又[illegible]の結びのとれば。「[illegible]」
「[illegible]」[illegible]て。[illegible]ず[illegible]より動くるゆ。上の
結びは[illegible]の[illegible]も。「やを」[illegible]やいひ[illegible]

[illegible]ず動くゆ。[illegible]結びのゆは[illegible]の結び
の除ゆもろ[illegible]を考へ合べし。

つ

つの結びの格

は とかくるる

後 ハ花乃ゝと出ずかの全状の聖寶ゝまゝひけゝハゝゝゝ

も とかくるる

新 我仏ゝまの心べゝゝゝゝ仕て長くゝ星をけゝもゝゝゝ

徒 ゝ結びゝる

つ

古 我仏ゝゝゝゝ

そ　とかうとらふ

後
天の岩戸の酒のうちぬつて秋の七月のけ事　そ　まつ

ち　とかうとらふ

後於
人もうれぬやうまてあれはんこうはまごと　ち　西氣たつ

や　とかうとらふ

六帖
ちうまぐ我かうれ月を山端のまちはまうへ　や　まつ

ち　弦びのは　も　徒　そ　ち　や　何　も。

かうとたるけぢうも。上の原のおとこ。

く の活びの格

徒

万 秋山はなりみちをかざしまがぎ紅葉は消なうちく 活びうるまま

古 立田河紅葉かく神無月しぐれの雨をたてあぎりしく

さ活びもよる同じく。ま た や 何の時。

うちく 五 ゆりかく 四 とうめぐき 四 ゆう。

く の活び おれも上の活びまり

は

ちかくとしつる

古 聖べ迫くゑ和 世れぐうぐひとはあくめる 色 月 を 兒 く

も

ちかくとしつる

古 子ゆ風くとゑ 河 雪 ゆ あ ら 山 紅 葉 ま ち ゆ く

徒

よ 活びしつる

古 秋風の吹くうびゐし夜嵐つづらさせてふるるくれ

(そ)

古 よとゝもに流れて(そ)ゆく泪河 [illegible]

(ま)

古 [illegible]

(や)

古 くるかと見れば過ぎゆくうどと(や)かく山郭公

(何)

[illegible]

古 [illegible]業は濁りなれ[illegible]なる[illegible]

[illegible]

む

む の弦じの格

徒 よ弦じゝる

万 郭る今はるきゝ む ゆめ夢ぶつゝまでみめと見たらめや

せ弦じもとの と の格と知れば

む

む の弦じ 芝も弦じる

は とかゝる

伊物 いかり知るきゝ者で留長ハ犯るの む 我往里に逢一絶えば

徒 よ弦じゝる

十 さる知るやゆいこゝろ知ゝる月ひとり む

そ

古いろ〳〵の形和歌はまだ出来ぬ（そ）く む

（や）ちかうてる

歌十 白雪積る遠くむこうのまの名うらやとかう歌を（や）はた む

（何）とかうてる

かすぐるを（何）う美や む 遠くの山を見る海ぶ和らもせず

は行 弦びのけちめもよく整ず

ゆ

ゆ

の弦びの格

（は）とかうてる

松

山里の家居かすまるまで垣根の柳末（ハ）とみ ゆ

五社百首 美詩よ（ハ）赤い霜月 ゆ うつくしうつのふの葛ふけ雲

ふの結びの格

(は) とかうとする

万 りみち堅今(ハ)うつ結ふ結んといひ時のゆけば

(も) とかうとふ

陵十 たゝりも雲の月(も)光うふ 枝のあやまを折りし社やま

(徒) よ結びする

(も) とかうとする

金 雪とも花ぶひもぞそび卯花ふるんぶ月は彩とも(も)こ

(徒) よ結ひする

万 ちぶふの時はうそひよるこ泡いやもくよ古坊ふ

(ハ) 大文の月はでは(ハ)ひびきとひごとのふる蓑はよびも

古 いつぐ〜て別て泪流す ふ あ酒さゝやかハ〜ゆん

そ とかゝるる

古 袁なねと人をの人ぐも書ぬかゝぬ〜ぬ〜ぬ〜

いく

いく の活びの格

は とかつてる

古 掛ぐ枝なほ有る篇まで書いてあげるとまで書いてる つ

も とかつてる

後 ふる里は雪か花とで降つてるあなたも我も知りひ消 つ

徒 ヨ活びてる

古 やどる春一人忘れぬ夜袴まとれぬ紀ふるひ つ

丸 とかつてる

古 花落ちて出てとびぬ名残ゆゆしも丸活び几 つ

つ の上、右のごとく は も 徒 丸 ようで

や 何 とも活び例す。又 つ ハ

なるべくは切るとうあくなるべく活へふ

てよりて

古事記 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

古 山里は秋こそとりわきてかなしけれ

秋 奥をおもうこころぶかき

衣のたぐひの［て］は留てとゝけるもかみへかゝる

掛ものゝ中ゝ中にもかゝるて上の

件の［て］ともひとつなり。

古 高砂山おろし［て］色板の実のこゝろとゝ紙ふる式

後 うゝめき実ゞ堀相の卯花をうしと見［て］も枯るの花

ちりゝのたぐひの［て］はふぐとゝかゝひて

冊四下

冊四上

冊四

冊四

冊四

ことをかくあり。

終座菊之。右の発句をおもてに。とて。とへかへてくぬ。諸組しるあるをふくめり。其ふくめもること。一首の趣をよく味ひまぶおのぼくらかくうるべしてもるるものあるとい人を

かな

かなの活ひの格

は　とかてアるる

詞　年をへてかまいうひかかるに孫ごを成ぎ㊀孫　紀　文

も　とかてアるる

古　活ぶ手ぬ者と濁る山の井のかるで㊁人を別れる　万葉

徒　と活びる

後
たまつくる仮くるは[illegible]をば。物とう物とう時は

(丸)とかるとうる

古
枯たる後まで成るまでふるる人(丸)甘草[illegible]

鈴屋箱云。物とうそ[illegible]と[illegible]辞よ。
を洗ふる物。なハ[illegible]
けゆゆく[illegible]とらべきをを。[illegible]とのこ
ひとるもおのー。又方絵ふハ[illegible]とらる
辞ふ後[illegible]とかるまでふれ

明治
とらへ足。國の字をかけるを三つ三つあれば。
天はをを[illegible]と[illegible]と[illegible]と[illegible]日本記
(も)(徒)(丸)ふる。(天)(平)(何)(古)のかるる
て八[illegible]ふふるるるといへる。

○もとくるの[illegible]

古
おるるる紀行をもく[illegible]
口
いつひとめとるまる。秘光抄[illegible]

あるくハうぐひすをもどせ。ひとのとくるを
もどせ。

ゆうの結び格

古 ゆう うたてゆく けき 流ぎてゆくうつ波のとまるかやう

月 月のすがたぢゆう 拘ゆう 必 しき 都所ひとつ妹ゆう袖ど

ち ちのゆう 子 苗とう しか いつのまゆる稲葉うよだて秋風のゆく

思 思へども人ばくみのたなびかつゆなくゆう とうとて 袖

後 なぶ我分もゆう紅葉とあるに同じ歌ゆう ゆう 道

古 かくゆう 今ハうぶ ゆう れ まれなるうぶとゆる時ゆうゆ 物を

源氏 ゆう 行ゆ 月ゆ 行ゆ 浪ゆ 結ゆ 海ゆ 毎 出て風ゆ 生ゆる 多 ゆう ゆき 九

古 雪ゆうて年のゆ九ゆる時ゆ ゆう つひとり ゆ 物 行ゆ ゆ ゆ

けれ
ふれ
しか
袖
道
なれ
たれ
けれ

夫木

わぎと（ゆう）こやまもつ（めも）ゃぐ水をひゃつるまつ紙

古

ねぐらもろこ（ゆう）たて（れ）橘花年を経る人も待けり

ね（れ）

大和物語

秋くるかこ彩（ゆう）必ずき初と思ひ中（めも）

つ（れ）

よるべふこ方を（ゆう）遠く海て（つも）舟出すがはなるふき

を（れ）

ひつる坂は冥こあづる在水はなで白ぬ（ゆう）ひ（れ）

く（れ）

あつまぢ三人の中ゆ月ぬて（ゆう）く（れ）

兼盛集

ふ（れ）

年を経て竜田ゆ水ゆそ老いつゆもぢで（ゆう）ふ（れ）

源氏

ぬ（れ）

ぬ（れ）

ぬ（れ）

けめ
らめ
なめ
てめ
らし

金までの形として（ゆう）さぶ［けめ］波ようぶりぶけり
大ゝやゝ後の山もけて（ゆう）八神代のまゝ見出［らめ］
けて（ゆう）野ん人ふなし［ちめ］うまぶた後のをぶてこよ
数ぬれどもあれどもまゝ山もけて（ゆう）橋をぶ形［てめ］
ぬなぶる人（ゆう）けう［らし］白玉はあくも美神ぶもよ

○新うねちゝくけて（ゆう）の格

新後（ゆう）けうぶ社畑の家［うめ］波ようしたいようしもみし
大和物語（ゆう）波の河まわる子ちゝ見て山ゝと天ぶうぶや

用例下

新人なゝぶ思ふ人をいひてまゝよ山さ（ゆう）八［勝ぬをぶ］巻

○いひゝて結ぶ（ゆう）

新ぬぶ沈ぶ人ふの紫をぶた沈むるよ分（ゆう）ぬくても［山］川の水
後拾遺（ゆう）ふゝ人めを［はぶかり］の笑よ洞と海ぶ波と
金あひゝまでぶゝよ今までも新ぬぶ（ゆう）［いぬ］のねぶ

（ゆう）ゝいぶぶむる格

古
けの山ぬなゝ人ぶ山ぬけとゝ人をゝんぶをのこ（ゆう）
後
けうぶの波て年八海ぶる分を雲けりへよけこ（ゆう）

まづて（おう）と申すは。ちがはぬ事。
して。ちがへ其ことをふくめる物。古今の事。
二年年を（ゆう）ねりとの。後撰の人。
ゆえ（ゆう）なれしとうかをまふくあたるあり。

まうしか と詠べる格

金
さしこねばり（ゆう）なる 我身はてつるがはべ
| と詠べる格

後
ひとも歳年きを詠とみるも時あるよりて（ゆう）こ
よそなげてる | と詠べるも。まうしか と詠べる。
いま | と詠べるも。| すべるもまを
| あり。

左 と詠べる格

千
よろ人の（ゆう）思ねるべ者と思ふ油のもづく 左
後古
ちてる（ゆう）人の命もうつる 左 多くの人世をる心ごとく

小 とゝぎす 格

三つの集
吹ぬしたづまとりぬきをれべし人をたづ[illegible]きんと字[illegible]

小 とかりて。[illegible]のをとゝきすとゝ近し。

小 とゝ 格 ゝ

後
せをいれてゝ[illegible]あげてゝ[illegible]とゝ絵どみゝ[illegible]蛇遊蛍ゝ

千
ちぐゝ[illegible]寝覚[illegible]春よりてゝ[illegible]とゝ[illegible]寝ゝ[illegible]春[illegible]現ゝ[illegible]せば

後拾
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

重ねてよをはの格

は　も　と　そ　ぬ　や　何　おう　と。さるべき事つよき多し。其時は　も　は　と　は低く。そ　ぬ　や　何　おう　は事記ゆ多し。おも記るの格よりて。詩ぶるう。

後拾遺　逢坂の関をや素のあとはん其人の山はけさは雲ある

古　桜花とく咲ぬとも散ぬる風と吹あへぬ

人を思ふ心本紫とたづぬ花の色に出ぬ

や　何　もおりて。そぞろへてゐたべし。

そ　や　何　おう　は。ひと事なる例す。

（此内と　や　何　と　を　は）

又一の格　ぬ　は　や　低きあり。そ　や　何　おう　と重なる事つ移り。おう　と重る時は。おう　の格を詩ん。

後　ぬ　は　なる事つ移る。おう　の格を詩ん。

さどのおとし。

歌文用例　てよをはの巻平

和歌七玉題林抄

和歌類葉集

七名家の百首歌を類聚し題ごとに分類したる書籍中の作例を求めたるものとす　全部二冊

編者は右大臣源三位松政、清輝卿の二人なれども類聚したる所は所々に作例を求めたるよき書也　全部二冊

文政元戊寅歳夏五月

書林

松阪　柏屋兵助
京都　勝村治右衛門
同　林安五郎
同　升屋武右衛門
同　菱屋孫兵衛
同　錢屋利兵衛
大阪　沖内屋嘉助
同　沖内屋嘉七
同　奈良屋長兵衛

歌文用例

大和ことばの部
てにをはの部

全部二冊

浪華書林

石倉堂
文榮堂
宣英堂

合梓